

平成30年度 第2回 滋賀県ふるさと・水と土保全対策推進懇話会議事録

日時：平成31年1月24日（木） 9：30～12：00

場所：滋賀県庁本館 4-A 会議室

出席委員：池田 美由紀、伊庭 治彦、上田 洋平、藤本 泰治

滋賀 SDGs×イノベーションハブ：紀戸 健治プロデューサー

議題

1) 多様な主体との連携による地域の活性化について

①しがのふるさと支え合いプロジェクト（以下「支え合いPJ」とする）・棚田地域の総合保全対策の取り組みについて

（資料1）

事務局より、パワーポイント（資料1）を用いて、多様な主体との連携による地域活性化について、支え合いPJと棚田地域の総合保全対策事業の取り組み状況を説明。

②滋賀 SDGs×イノベーションハブの取り組みについて

紀戸健治プロデューサーより配布資料を用いて取り組みを紹介。

本取り組みはもともと滋賀経済同友会が実施していた「ニュー・グリーン成長社会」の実現に向けての勉強会から始まりました。この理念はSDGsの考えと同様であり、滋賀県も県としてSDGsの推進を提唱したことから滋賀経済同友会としてもSDGsの勉強会とともに達成に向けて協力していくこととしました。

アウトサイド・インとは社会課題を基点とした新規ビジネスの創出を指し、滋賀 SDGs×イノベーションハブ（愛称：しがハブ）はこの新たなビジネスモデルの提案を行います。この目指すビジネスモデルを「SHIGA 戦略的 CSR 経営モデル 2030」として展開してまいります。

しがハブは県内の6経済団体が連帯して作った組織で、社会課題を民間の力で解決するための組織となります。社会的課題解決という視点で農業と企業をつなげる取り組みも可能と考えています。

③「近江楽座」について

上田委員（滋賀県立大学助教）より近江楽座のパンフレットを用いて取り組みを紹介。

「近江楽座」とは地域貢献を目的とする学生主体のプロジェクトで、大学として支援しています。これまでに延べ 5000 人ほどの学生が参加しました。毎年 10 チームほどが活動しています。「支え合い PJ」は 3 年以上の活動継続となっています。いきなり 3 年は難しいと思います。そこで、大学の授業をお見合いに使うのが良い方法と考えます。

学生が地域に入る場合、まずは飛び込む、知る、そして貢献する。最後は一緒に仲間になる。企業の場合も同じではないかと思えます。課題を地域から頂いてフィールドワークを行う授業などで地域に入っていくことで、つながりから発展していきます。政所茶の「茶レン茶`一」の取り組みなどは、夏休みの集中講義として学生が地域に入ったことがきっかけで、地域の方から茶園を借りて栽培する動きに発展しました。このように授業で地域に入る機会を企業にも利用してもらおうと支え合い PJ のマッチングの場にできると考えます。学生は、地域住民との関係を築くのに良い触媒効果となっています。「支え合い PJ」の展開として、同じ場に企業の方も入ってもらおうと良いと考えます。

今、注目しているのは他出子の存在です。地域では人手不足のため、神輿かきの手が足りず、学生がかいていることが多い。そうでないと成り立たない地域も増えています。他出子はお祭りなどの行事の手伝い方が分からないため、それを見ているだけになっている。本来は中に入ってもらうべき存在。最近では、他出子自体が観ているだけで良いのかとの思いから、学生とコミュニケーションを取って馴染むような動きもあります。一方で親父らは、せっかく帰ってきたのに手伝わせると悪いと息子らに忤度してしまい、帰ってきた他出子は集落への入り方が分からないということになっています。このように若者、企業、学生が地域に入ることによってコミュニケーションが促進される効果を生み出します。実際、沖島では今年の左義長祭りで他出子と学生達の交流が持たれました。やっぱり地域が主役と言うならば、そこの子息にもどうアプローチするかということも必要な視点です。他出子のことなどを委員にも聞いてみたいと思っています。

主な意見と質疑応答は以下のとおり

(委員)

中山間地域リーダー育成研修会の参加者はどのような人達が参加されていますか。

(事務局)

様々な立場、年齢層に参加して欲しいとの思いから、平日夜の開催としましたが、結果的に参加者の大半は年配の方でした。自分達の地域をなんとかしなければと思っている方々が参加されています。

(委員)

棚田保全活動は地域にとって大きなメリットだと思います。中山間地域は高齢化が進んでいるため、このプロジェクトをきっかけに、地域を手伝う人、地域に移住する人などが

出てくれば良いと思います。3年間の活動期間だけでなく、出会いがあればずっと継続できれば良いと思います。

(委員)

先ほどから“継続”という言葉がキーワードになっています。大きい地区であれば人材がいると思いますが、小さな地区では人材がおらず継続が難しいです。だんだん縮小していく現状があると思います。

今は、まず自分がやれることをやっています。定年退職者など、協力してくれる人に声をかけて活動しています。この先、どれほど続けていけるかが問題です。他の地域の人たちが来てくれるように茶畑に梅の木を植える活動に取り組んでいます。お金儲けではなく、集落に足を運んでくれる人たちを増やしたいとの思いです。また、野外活動や民泊についても取り組んでいます。今日、示されたように農村集落の現状は、皆さん認識されているので、なんとか良い方向に向かって少しでも動ければと思っています。

(委員)

民泊で個別に受け入れている農家は、マニュアル等を行政から受け取ってはいるけれども、受け入れる農家同士が交流の場などで情報交換を行い、ノウハウの共有を図ることがとても大事になります。交流の場を設けたらとても好評で、このようなサポートを県などが担うことが重要です。

(委員)

継続性が重要で、そのためにはどのようなコンテンツを整えるかが問われます。4~5年前に島根県で調査した時に農繁期に他出子がたくさん帰ってくる地域がありました。このネットワークのハブは親ではなくて同級生です。もう一つは、他出子が帰省する時に職場の友達を連れてきます。その人はたまたま非農家で同僚に連れられてやってきて、やってみると楽しくなって気が付けば農繁期に田植機に乗っているのが他出子と友達というケースもあります。よって、色々なルートを使って人を集めるべきであり、効果的なハブがあるので、それを見極めていろんなハブを作っていくことが重要です。

(委員)

やはり同窓生、同窓会が大事とのことで帰ってはくるけれども、次男、三男は泊るところに遠慮して、すぐに帰ってしまうことがあります。帰省しても長男夫婦が暮らす実家には泊まりにくいようです。その点で注目したいのが、和歌山県田辺市の「秋津野ガルテン」と廃校利用の宿泊施設です。学生にも宿泊拠点が必要ですので、どちらも使えるものが良いです。ここは、同窓会を安く開催できる施設で、元小学校ですので、そこで同窓会を行って一泊すると、おのずと地域課題の話になるそうです。また、地域を支える人の中で、成人式も素直に出席し場を盛り上げてくれるようなタイプの人がよそ者を受け入れてつなげてくれる役目を果たします。親子のような直列の関係は意外と難しいようです。大事な

のは他出子世代が、親が亡くなった後に田んぼ、山を引き継ぐことになるので、今、押さえておかないとバラバラになってしまいます。

(委員)

自分達の世代は会社に務めていても百姓なら土地を守るのは当たり前でした。地区の中に40～50代が5人程いますが、ほとんど農業をしている姿を見ないです。ただし、農繁期に機械に乗っていることはあります。若い世代は親世代に比べ綺麗に耕せない、整地できない、田植えができないことから、親が機械に乗り、息子が農地に座っているといった状況です。

(委員)

子世代ターンではなく、最近は孫ターンが出始めています。孫が新規就農する場合は、地元住民に抵抗感がなく、地域にとっても入り易い傾向にあります。

(委員)

先ほど委員は、お金儲けでないとっておられました。それは「地域愛」だと思います。しかし、お金にならないと人は戻ってこないのが現実です。ですから、頼ってくる受け皿として、そこに住んでいくには収入が必要であり、生活できるかだと思うのです。私の仲間で農業をされている方達は、父親が農業をして裕福に生活しているので、これは大丈夫だと感じて継いでいます。ですから、地域の者が暮らしを確立していくことが大事です。皆さんが行っていることを農業経済と結びつけ、お金の回りをよくすることが必要です。

(しがハブ)

農家の後継ぎがない、農地が荒廃していく中で農家や農地をいかに守っていくかとの相談にのっています。農地や農家を守るために職業としてある程度お金が入って来ないと人は帰って来ないでしょう。やはり経済のバランスが大事です。

高島市が総合計画をつくる際に市内の高校生500名ほどを対象にアンケートされたようです。高島市で住みたいかとの問いに対しほとんどが「住みたくない」と回答していたようです。その理由は「働き口がない」「魅力ある職業がない」というものでした。その一方で、住むには良いところなので「定年後は帰ってきたい」という回答は80%ほどに上ったと聞きました。家に田んぼがあるので、返ってきたら農業をするのも良いと感じているようでした。しかし、Uターンして美味しいお米を作っても自分のお米として位置付けられません。そこで、より収益を上げるために、直接販売や6次化を行う人が居て、ハブでは百貨店などでの販売などをお手伝いしていることもあります。退職後に10年ほど農業をされるにしても、事業としての収入がないと、やり甲斐もなく、人生に面白味がないと思うのです。

持続可能な農業を行なうとすると、その地域それぞれで、農業や人、状況が異なります。1つのパッケージみたいな支援策があっても良いですが、人の思いを拾える応用が利く形態

にしておかないと機能しないでしょう。やったことに対して世間の評価と対価がないと暮らし、子育て、教育が成り立ちません。農作物を売って収入を得ること、工夫をして商いをして、収入が得られる喜びがないと風光明媚なところで過ごすだけでは続かないと思うのです。

個人的な考えですが、お手伝いしてくれる企業様も取り込みながら、如何に農業者、漁業者、林業者の収益を上げていくか。これをベースに考えて持続可能な形を作っていくのかを考えています。農家さんが6次産業化してものを売りに行くようなことを求めているわけではありません。それは代わりに営業して繋いでいくようにしています。しかし、全てに対応はできません。

儲かる仕組みをつくり業として成り立つようにすることが必要。若者が「パン屋やりたい」というのと同じように「農業をやりたい」という人が出てくる収益を実現することが大事です。仕組みづくりが重要で、そのために企業さんに入ってもらふことなども必要で、ベストプラン作りが求められています。

その意味で魚のゆりかご水田を行っている須原地区などは良い事例になっていると思います。受け入れる側も大変だと思います。怪我の防止もありますし、思う様に作業ができない人もいます。だからリーダーの育成も大切になります。各地域にあったモデルづくりが必要になります。地域に入り関わる中で企業さんの特性などを把握した上でご紹介させて頂いています。

(委員)

銀行はSDGs関連で、融資などのサービスとして何かありますか。また、農家農業に対する特徴的なサービスはありますか。

(しがハブ)

特別な融資サービスなどはありません。しがハブは、SDGsに取り組んでいるところでの課題解決をベースに考えています。

銀行も農業でものづくりしているところと経営、収支をしっかりと考えて進めます。慣れていないところとでは、事業収支をしっかりと確認し、事業について話し合い、方法をお伝えするなどして、事業として考えるための基礎作りを進めます。一気にそこへは行けないので必要なことを教え、農業に関することでは逆に教えて頂きながら取り組んでいます。新しい情報源として、銀行も良いと思います。

(委員)

融資となれば農家は大きなリスクを背負うことになります。出資して頂くと農家のリスクは大きく下がります。誰かがどこかで出資者を公募してあげないといけません。そのような支援はありますか。

(しがハブ)

そのような支援はありません。事業を行う場合、そのリスクは背負って頂くことになります。農家に限らず企業についても同じでして、リスクを背負って取り組んでいくのが商売です。行政等からの出資金を当てに活動しますと、その資金を当てにして、その資金が終わることで事業も終わってしまうことにもなります。

(委員)

事業を行うのは大きなリスクです。そのリスクを受けるようにしてあげるか、リスクを軽くしてあげるか考えなければなりません。私のいうリスクは、お金のリスクを指しています。

(しがハブ)

農家さんが大きな金額を背負って設備を整えて事業をしようとはいいません。まずは去年よりもたくさん売れば良いですし、それにより地域の人何人かが手伝う様になれば良いと思います。更に、地域で取り組むようになることで企業が関わるようになり、WIN-WIN の関係を築ければ良いと考えています。個人からはじめて集落へと事業規模をだんだん大きくしていくもの一つです。

銀行は、後押しによりやって行けるかどうかを、事業をみて判断します。無理な計画ではお客様に迷惑をかけます。地域の方々を長い目でみていきます。貸すだけ貸して厳しい対応というのは、どこの銀行もしないと思います。話し合いでお互い納得しながら進めますが、お客さんにも努力して頂き、ある程度のリスクを背負って頂くことになります。

(委員)

ビジネスをつくるには seeds が必要です。seeds の提案もされますか。

(しがハブ)

しがハブでは seeds の提案もします。例えば、「この土地で、このようなものを作って事業をしませんか」といった提案をするデベロッパーのようなこともしています。

(委員)

県から報告があったように、現在進めている取り組みはボランティアが中心で非営利組織が非営利の活動として行っているため、継続していくことは難しいです。継続のためには、経済効率を付けるか、行政が切らさないで支えていくしかないと思います。これに経済事業をつけて自立的に事業が進めば良いのですが。

(しがハブ)

きっかけづくりを行政がして下さるのは有難い話で、ここに参加したら、ある程度のお金が出るという先行者メリットなどがあるのも良いと思います。こちらが考えているのは、この動きにより企業の参加があり、地元と企業それぞれにメリットがある形です。最終的

には、できたものがより高く売れるようになることや、「こういうことをやると面白いのでは？」と広がりを持つことです。

(委員)

お話のように経済的に発展できれば、それに越したことはないのですが、中山間地域の場合、そのようなことができる条件にありません。収入が低く、コストは高くかかり、時にはマイナスとなってしまいます。滋賀県は交通の便が良いため、皆、街へと出ていきま。地域を守らなければならないため、自分たちの世代は頑張っています。子世代に話してもなかなかうまくいきません。地域を守らなければならないのですが、それが上手いれないため、中高生の学習旅行などを受け入れています。こういった小さな取り組みについて、県から広く世間に情報発信して頂きたいのです。

ある程度、規模の大きな取り組み、例えば棚田ボランティアの取り組みは県が広報を担っています。しかし、個人や小さなグループによる取り組みは、SNSで発信しても信頼を得るのが難しいです。もちろん信頼を得るためにも取り組んでいる者は真剣に取り組まなければなりません。様々な地域で頑張っている人達がいるので、都会の人たちの取り合いになっています。信頼できる発信ができれば、小さな取り組みも生き、上手く行く場合もあるのではないのでしょうか。

(委員)

クラウドファンディングやふるさと納税応援サイトなどがそれに当たるでしょう。一定のレベル、一定の基準に基づいています。提供する側の信用に関わることでありますから、それぞれの取り組みをチェックしており、信頼が保証されています。若者は、そのようなサイトを作るのが上手です。

そこに居る理由、行く理由が必ずあります。年上の世代はかつて農山村に生業があったので、そこに暮らす理由となりました。新しい理由がこれから出来てくるかもしれません。

経済と守ること、および新たな理由としてITによる支援がそこに居る理由を生み出すことになるのではないのでしょうか。「支え合い」を支えるプロジェクト、「支え合い」を支えるサイトなどが必要だと思います。

(しがハブ)

「支え合いPJ」を行政が進めることになった理由は課題が見えてきたからでしょう。その解決に向かうために新しい商売ができてくると思います。

今までは、困った人が相談に来て、アドバイスを受けて、それを参考に動くことが前提になっていましたが、それだけではやっていけないようになっていきます。自ら課題を見つけ出し、それに対応するモデルをどんどん作っていく組織が立ち上がる時代になっています。そうなれば、一次産業関係の人たちや先生方とのネットワークを持つ人材が育ちます。このような専門職を先行して作れば、それを生業にする商売屋さんもでてくるかもしれません。当面は行政にお願いするしかないかも知れませんが、私らが相談にのって進められ

ることもあるかも知れません。

(委員)

情報が多くある中で、オーソライズ（公認）された情報源が必要です。二セ情報でないものを発信していくことが大切です。これは行政の役割となるでしょう。

(事務局)

農村地域、中山間地域が今後、どうしていくのか問われています。中山間地域は農業を行うには不利な地域であり、雇用先もあまりありません。しかし、滋賀県はまだ比較的地理条件が良いため、中山間地域に住み、勤め先が近隣であることが多いことから、農村地域が比較的守られています。

そういう意味では経済が非常に重要であると言えます。中山間地域にしかない農作物があるはずで、棚田米、魚のゆりかご水田米などがあります。それらは、苦勞をして頂いて作られるものです。その苦勞がSDGsなどの貢献となっています。平地で農業を営むことより大変ですが、価値あるものと考えています。私どもはこれまで土地改良、圃場整備などで都市に負けない農業環境を作ることを進めてきました。

それだけでは駄目だとの思いから、地域の心を含めた事業を推進するために先生方のお知恵を拝借してきました。継続することが一番の課題ではありますが、集落の力だけでは難しいです。そこで、よその人の力を借りること、協定を締結し、3年間協働活動を行っていた「支え合いPJ」により道を探ってもらうことを考えました。

地域の良いところをよその人から言うて頂くことで住民がそれに気付くことになり、それが一つの産業、6次産業化に結び付き、その地域の人たちだけでは難しいことでも、周辺地域と連携することで達成できるようになることを願っています。行政は財政不足もあり、一つのことを未永く支援することはできませんが、集落の人が何かをやりたいとおっしゃった時には色々な方面から行政が支援できることがあると思っています。地域が元気になることを、支え合いPJで実現できることを願っています。

その他 各委員・出席者の意見

(委員)

そこで生まれ、育った人とよそ者たちの交流が、この制度を用いて生まれることに期待します。専業と兼業の農家では、学生たちとの関わり方と支援の仕方が異なってきます。

専業農家の方は大規模化の方向にあります。滋賀県は兼業農家が多いことが特徴です。

今後、小さく守り育てていく農業を進める中で、企業が副業を認めるという動きもあります。それらを上手くつなげていくために、県行政の概念やイメージを伝えていくことも大事になるでしょう。

(委員)

地域を守る気持ちと経済がまわる仕組みができればと思います。

(しがハブ)

地域、農業、農業遺産を守る良い取り組みだと思います。持続可能な取り組みにするならば、経済性を考えた仕組みづくりが必要です。儲からない場合はどうしたら良いのかという発想で、取り組まれるのが良いと思います。そのための支援を、しがハブが担います。

(委員)

継続性の問題では、地域に資源があるかどうか。そして、そのアイデアをいかに事業化するかどうかです。そのためにプラットフォームやビジネスモデルと言ったものが挙げられ、しがハブ等がそれを担うことになっていくのだと思います。そして、もう一つ必要なのは、リスクをどうシェアするかです。数十万円にしても農家にとってはリスクです。それを自己資金で進めるのか、融資なのか、借金なのか。これをどうシェアするのが大事です。農家 1 人には負担が大きいことでも 5 人、10 人でシェアすればリスクは大きく下がります。このシステムをどうつくるかが大事です。

地域の事業をどう実現し、動かすかということと、その裏側でどうリスクをシェアするかが必要です。これが出来れば多少ハードルが下がると思います。今日の議論を経てそう感じました。

以 上